博多 33

—博多遺跡群第69次発掘調査概報—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第288集

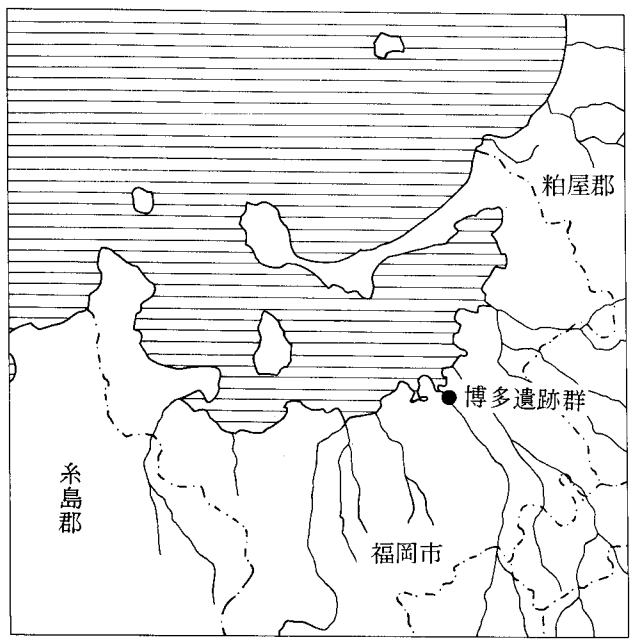
1992

福岡市教育委員会

博多 33

—博多遺跡群第69次発掘調査概報—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第288集



遺跡略号　ＨＫＴ-69
遺跡調査番号9055

1992

福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化流入の門戸として栄えた都市遺跡「博多」の発掘調査は近年の都心部の再開発に伴い、現在までに70次を越え、調査の進展とともに新たな知見が得られています。

本書は倉庫建設に伴って実施された第69次調査の概要を報告するものです。第69次調査は旧「息の浜」、国際貿易都市「博多」で調査された中で最も北に位置する区域で、豊臣秀吉による九州平定後の博多の再興と何らかの関連をもった遺構が検出されるなど、興味深い成果があがっています。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から資料整理にいたるまでご理解とご協力をいただいた株式会社大塚倉庫、ならびに施工に当たられた株式会社奥村組をはじめとする関係各位に対し、心から感謝を表する次第です。

平成４年１月13日

福岡市教育委員会

教育長　井口　雄哉

例　言

1．本書は株式会社大塚倉庫による倉庫建設に伴い、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成2年度に発掘調査を実施した博多遺跡群第69次調査の概要の報告である。

2．本書に掲載した遺構の実測は担当の福岡市教育委員会埋蔵文化財課の佐藤一郎の他、高田一弘、西口キミ子さんたちの協力を得た。撮影は佐藤があたった。

3．本書に掲載した遺物の実測は佐藤、撮影は二宮忠司（福岡市埋蔵文化財センター）があたった。

4．製図は遺構を藤村佳公恵、遺物は佐藤が行った。

5．本報告の記録類、出土遺物は、収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので、活用されたい。

6．本書の執筆、編集は佐藤が行ったが、調査で検出した人骨について九州大学医学部解剖学教室第二講座の中橋孝博先生の玉稿をいただいた。

目　次

序
Ⅰ　はじめに…… 1
　1　調査に至る経過…… 1
　2　調査の組織…… 1
Ⅱ　遺跡の位置と環境…… 2
Ⅲ　発掘調査の概要…… 3
Ⅳ　遺構と遺物…… 5
　1　検出遺構…… 5
　　井戸…… 5
　　墳墓…… 5
　　柱列…… 6
　　溝…… 6
　2　出土遺物…… 9
Ⅴ　小結……13
　付篇　　博多遺跡群第69次調査出土中世人骨
　　九州大学医学部解剖学第二講座　中　橋　孝　博 ……15

挿図目次

第１図　博多遺跡群発掘調査地域図…… 3
第２図　博多遺跡群第69次調査地域周辺図…… 4
第３図　博多遺跡群第69次調査遺構配置図……折り込み
第４図　井戸実測図　(1)…… 6
第５図　井戸実測図　(2)…… 7
第６図　墳墓・柱列実測図…… 8
第７図　SE23・35、SX45出土遺物実測図 ……10
第８図　SX34出土遺物実測図……11
第９図　SA40、包含層出土遺物実測図……12

図版目次

図版１　１．博多遺跡群第69次調査区全景（北西から）
　　２．博多遺跡群第69次調査区全景（南東から）
図版２　１．SE23・37井戸（西から）　２．SE37井戸（西から）
図版３　１．SE35井戸（北西から）　２．SE34甕棺墓（北から）
図版４　１．SX45木棺墓（北東から）　２．SX43土壙墓（南西から）
図版５　１．SX43土壙墓（南東から）　２．SD38溝（北東から）
図版６　SE23・35出土遺物
図版７　SE35、SX34・45出土遺物
図版８　SX34、SA40包含層出土遺物

Ⅰ はじめに

1 調査に至る経過

1990年、株式会社大塚倉庫から本市に対して博多区奈良屋町267番における倉庫建設に伴う埋蔵文化財事前審査願書が申請された。申請地は周知の遺跡であるところの「博多遺跡群」に含まれており、その東南約200mには戦国時代末の豪商神屋宗湛の屋敷跡が位置する。福岡市教育委員会埋蔵文化財課が、これを受けて1990年10月9日に試掘調査を実施した結果、全体的に近代から現代の攪乱が目立つものの地表下150cm前後で中世の包含層が確認された。申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議をもったが、申請面積735m²の内地下掘削部分の約260m²を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。株式会社大塚倉庫と福岡市との間に発掘調査および資料整理に関する委託契約を締結し、調査は暮れも差し迫った同年12月25日から翌年1991年1月31日まで行われた。

2 調査の組織

調査委託　株式会社大塚倉庫

調査主体　福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括　埋蔵文化財課長　柳田純孝（前任）　埋蔵文化財課長　折尾学

　　第2係長　柳沢一男（前任）　第2係長　塩屋勝利

庶務担当　松延好文（前任）　吉田麻由美

調査担当　試掘調査　加藤良彦　瀧本正志

　　発掘調査　佐藤一郎

発掘作業・資料整理協力者　出雲義住・麻植康太郎・大村芳雄・真田弘二・田中展史・塚脇洋一・浜地富男・福澤山次郎・船越恒人・三浦力・相川和子・上野ミヤ子・内山和子・奥田弘子・久良木シズエ・黒木美代子・高石ヤス子・舎川キチエ・平野志津江・藤野邦子・藤村佳公恵・丸山信枝・宮崎芳子・村上エミカ・村上エミ子・脇坂レイコ

その他、発掘調査に至るまでの諸々の条件整備、調査中の調整等について施工業者の株式会社奥村組の皆様には多大なご理解とご協力をいただき、博多遺跡群第68次調査担当の井澤洋一氏からは多くの人的援助を受け、調査が円滑に進み無事終了することができました。ここに深く感謝します。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

本調査区は、博多遺跡群に含まれる２つの砂丘の内、海側の「息の浜」砂丘の北側斜面に位置する。現地表の標高は4.2ｍを測る。

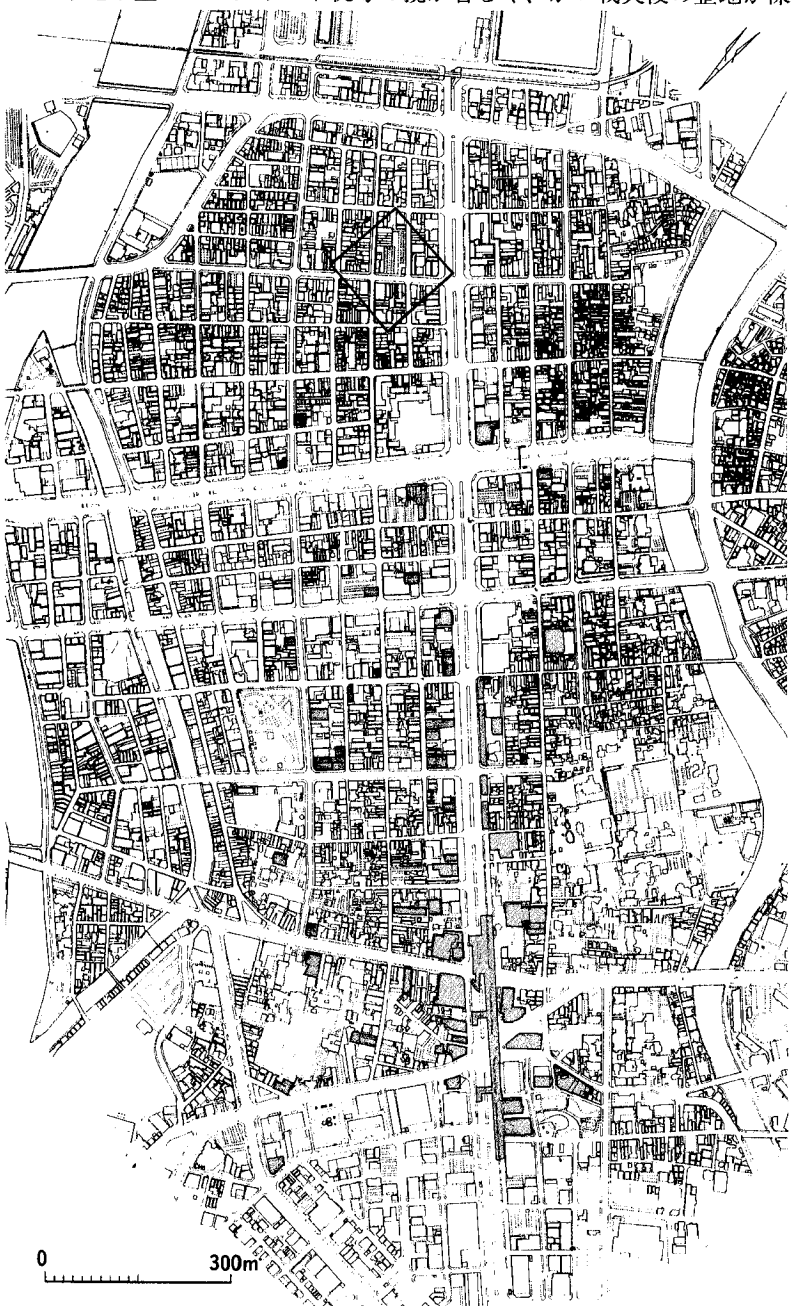
「息の浜」の浜における本格的な発掘調査は1988年度の博多遺跡群第42次調査が最初にあたる。「息の浜」の最高部からもう１つの砂丘の「博多浜」との境をなす西側の湾入部へ傾斜する南側斜面に位置する。遺構がみられるようになるのはさかのぼっても11世紀で、隣接する第60次調査、西側斜面に位置する第46・55次調査においても同様である。「博多浜」では弥生時代から集落、墓地が営まれ、11世紀後半頃には都市を形成するに至ったのに対し、「息の浜」では集落の形成が始まるのは11世紀からで、「博多浜」の都市化の拡大に伴い、12世紀後半頃に都市博多に編入される。都市博多においては比較的新興の地域である。その後も都市化の拡大、海岸線の前進に伴い「息の浜」部の遺跡群は時期を追って拡がっていき15、16世紀には「博多浜」部を凌ぐようになるが、「博多浜」と同様に度重なる戦乱による焼失・復興を繰り返していく。1333（元弘３）年、鎮西探題追討で功により大友氏は「息の浜」の領有を認められはしたが、その後も大内氏らと「息の浜」領有をめぐって激しく争う。1551（天文20）年の大内氏滅亡によりその領有を確固たるものとし、1559（永禄２）年には九州探題に任ぜられる。1569（永禄12）年には、立花城をめぐって毛利氏と激しく争い、戦火は当然博多にも及んだ。その時、若き日の宗湛ら神屋家の一族は唐津へ疎開している。その後の復興も束の間、1580（天正８）年に龍造寺氏、1586（天正14）年には島津氏に焼き討ちに遭っている。1587（天正15）年、度重なる戦乱によっ疲弊しきった博多の町は漸く豊臣秀吉の命によって完全に復興される。その一つがいわゆる太閤町割で、現在の博多の町割りにも踏襲されている。博多の町の復興には博多の豪商である島井宗室、神屋宗湛らの多大な尽力があった。それと同時に彼らは秀吉から特権を与えられ、対外との交易等で巨万の富を得た。博多復興の時点で秀吉は後の朝鮮出兵のための兵站基地として期するものがあったであろうが、秀吉の死、その後の徳川幕府による鎖国政策により、国際貿易港の座を長崎に明け渡す。

当調査地は「息の浜」部でも最も北に位置し、16世紀末よりさかのぼる遺構はみられない。それ以前の海岸線が内陸寄りであったことによるのであろう。当調査地より南西に約200ｍと約400ｍ砂丘のやや高まった標高約５ｍの区域がそれぞれ神屋宗湛、島井宗室の屋敷跡と推定されている。また当調査地の西約200ｍの区域は14世紀初頭に創建されたとされる妙楽寺推定地にあたる。

以上、川添昭二編「よみがえる中世Ⅰ　東アジアの国際都市　博多」1988
武野要子　「博多の豪商」1980によるところが大きい。

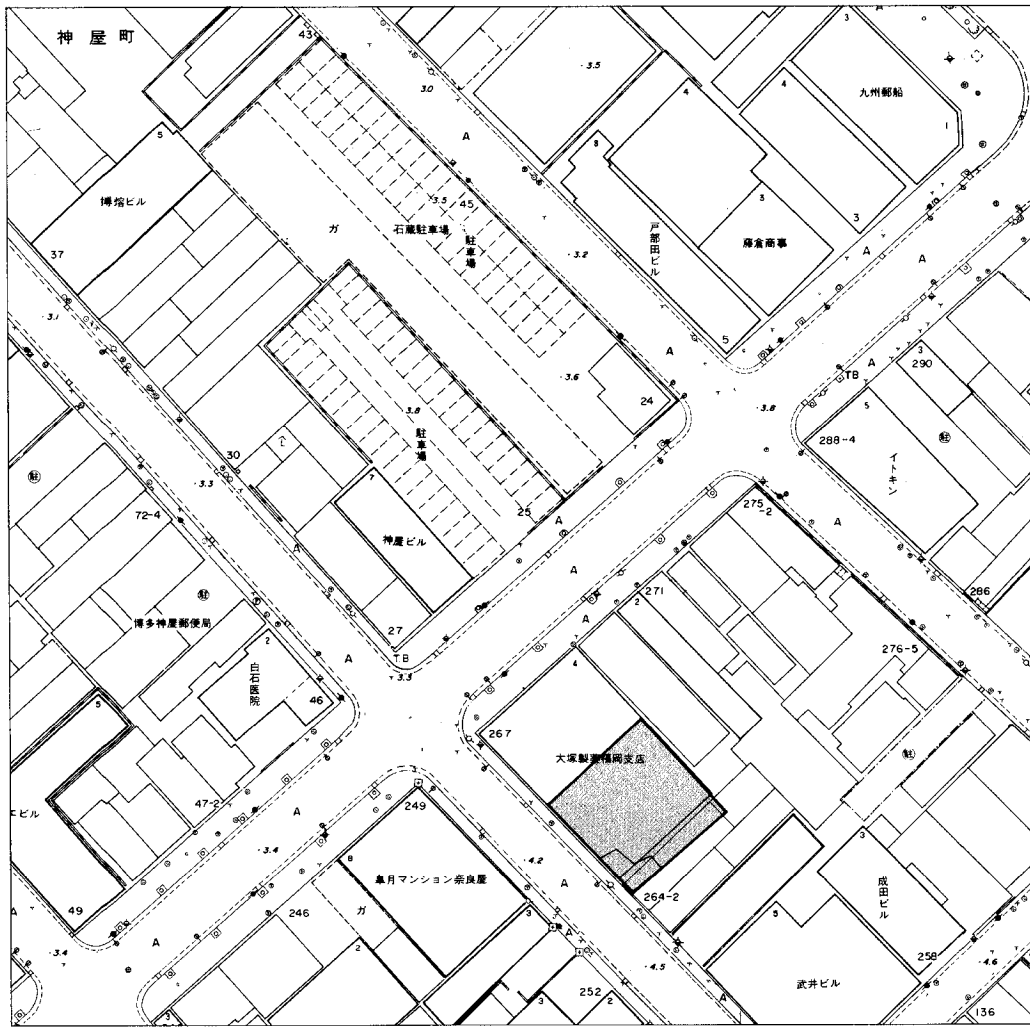
Ⅲ　発掘調査の概要

調査は12月25日にバックホーによる造成土の鋤取りから開始した。調査区域は以前は倉庫兼事務所として利用されており地下室・コンクリート杭等の攪が著しく、かつ戦災後の整地が深く及び、地表下約1.5cmで厚さ10cm前後の中世の包含層（暗灰色砂質土）が確認された。包含層を人力で掘り下げ、基盤の粗砂層の上面で遺構の検出に当たったが、攪乱の掘り込みは遺構面にも深く及び、攪乱の除去に多大な労を要した。調査区四周の壁面にはH鋼が1mの間隔で打ち込まれ、その間にコンクリートを浸透させることによって補強し直に掘削されており、バックホーの進入のためのスロープを調査区の南西隅に残すこととなった。その部分の調査はその残りの部分の調査が終了した時点で行うこととなった。排土は調査区域の北側に仮置きした。検出され

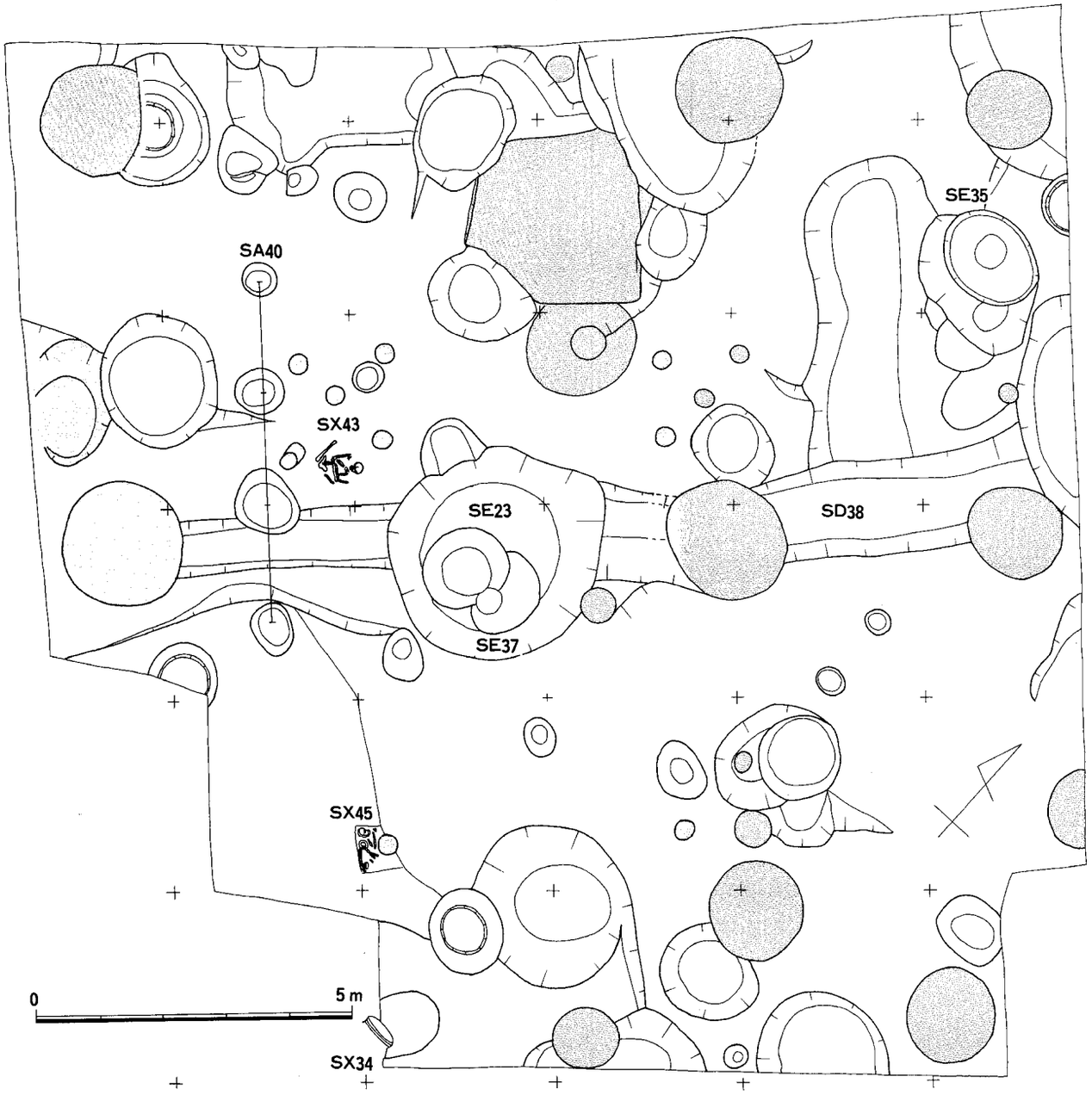


第1図　博多遺跡群発掘調査地域図

た遺構は16世紀末から17世紀初頭にかけての溝１条、井戸３基、木棺墓１基、甕棺墓１基、土壙墓（墓壙は確認することができなかった。）１基である。調査の最終段階に入って、本工事の工程の一部と並行して調査を行うこととなったが、掘削時の湧水を防ぐために調査区中央部に据えつけられた排水ポンプが稼働することによって水位が大幅に下がり、それまで井戸枠付近までしか検出できなかった井戸を完掘することができた。墳墓調査区の南西隅に集中して検出されたが、南側の壁面にかかって確認された備前焼の大甕を用いた甕棺墓１基がＨ鋼とコンクリートにより四周が固められていたために拡張して検出することができずその半分近くを欠失した状態で取り上げざるを得なかったことは、調査・工事の工程上致し方ないとはいえ甚だ残念である。



第２図　博多遺跡群第69次調査地域周辺図



第３図　博多遺跡群第69次調査遺構配置図

Ⅳ　遺構と遺物

1　検出遺構

井戸

ＳＥ23（第４図、図版２）　調査区のほぼ中央で検出した。掘り方は二段掘りで、上面3.3ｍの略円形を呈し、深さは1.9ｍを測る。基底部に上端径80㎝、下端径75㎝、深さ6.5㎝の桶側が据えられていた。東側をSE37に切られる。SD38を切る。

SE37（第５図、図版３）　調査区のほぼ中央で検出したSE23を切る井戸である。掘り方は二段掘りで、上面3.1ｍの略円形を呈し、深さは1.8ｍを測る。基底部に上端径38㎝、下端径42㎝、深さ2.5㎝の桶側３段が据えられ、下部には径20㎝、深さ10㎝の曲物が据えられていた。

SE35（第５図、図版２）　調査区の北側で検出した。掘り方は上面1.5ｍの楕円形を呈し、深さは1.2ｍを測る。基底部に上端径5.5㎝、下端径5.5㎝、深さ4.5㎝の桶側が据えられ、下部には径2.5㎝、深さ1.5㎝の曲物が据えられていた。

埋葬遺構

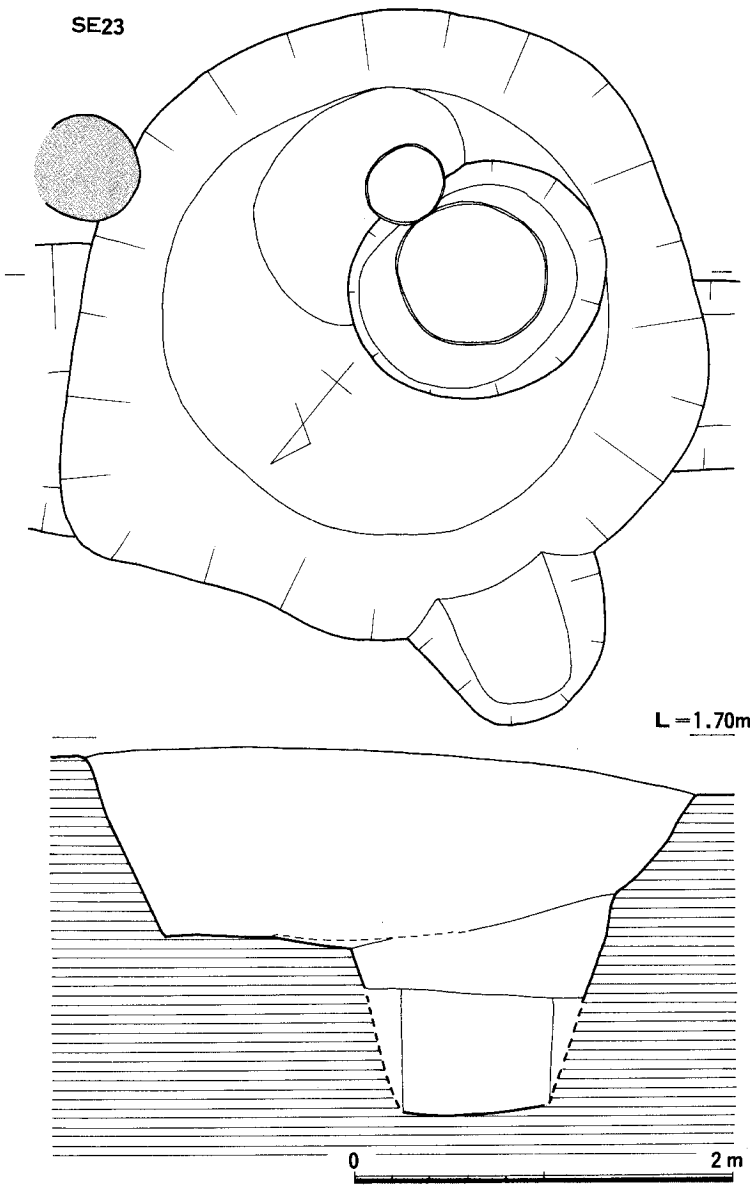
SX34（第６図、図版３）　調査区の南端で検出した備前焼Ⅴ期の大甕を使用した甕棺墓である。主軸はほぼ真北にとり、甕の埋置角度は12°を測る。棺内には人骨が残存していたが、残存状態は良くない。ほかに完形の軒平瓦１が棺内に入っていた。墓壙の掘り方は検出できなかった。南東方向の壁面にかかって確認され、四周がＨ鋼とコンクリートより固められていたために拡張して検出することができずその下半部分を欠失した状態で取り上げざるを得なかった。

SX45（第６図、図版４）　調査区の南側で検出した木棺墓である。木棺の木質の痕跡が辛うじて残存し、棺材を留めたとみられる鉄釘片が棺内の底面付近で出土したが、原位置移動して棺内に落ち込んだものであろう。人骨部の南東から土師器杯が底面より約10㎝浮いた状態で出土した。北東側が攪乱、コンクリート杭によって損壊していた。主軸はＮ－40°－Ｗにとる。墓壙の掘り方は検出できなかった。

SX43（第６図、図版４・５）　調査区の中央のやや西寄りで検出した。墓壙の掘り方は検出できず、副葬品にあたる遺物の出土はなく、土壙墓とみなすには問題がある。

SX43を埋葬遺構とした場合、SX34・45・43は同一直線上に並びそれぞれの心々距離は6.0ｍ、3.0ｍを測り、一定の規格をとって埋葬されたと考えられ、直線の主軸が豊臣秀吉の町割りを踏襲した現在の博多の町割りに沿ったものであること、これらの埋葬遺構が地表下約1.5ｍで確認された厚さ10㎝前後の中世末（下って17世紀初頭）の包含層（暗灰色砂質土）の下面で検出されたこと、SX34甕棺墓に備前焼Ⅴ期の大甕が使用され、SX45木棺墓の副葬品にあたる土師器杯が中世末に盛行する底部静糸切り離しによることから、中世末に第69次調査区周辺が墓

域として利用されていたことが推定される。備前焼の大甕を甕棺に用いた例は少なく、明治時代に豊臣秀吉の墓所を整備した際の記録に、備前焼Ⅴ期の大甕と推定できる甕の存在が記されており、SX34甕棺墓の被葬者は博多の町の再興に尽力した筑前国を治めた小早川氏、博多の豪商たちに近い特別な人物の可能性が高い。



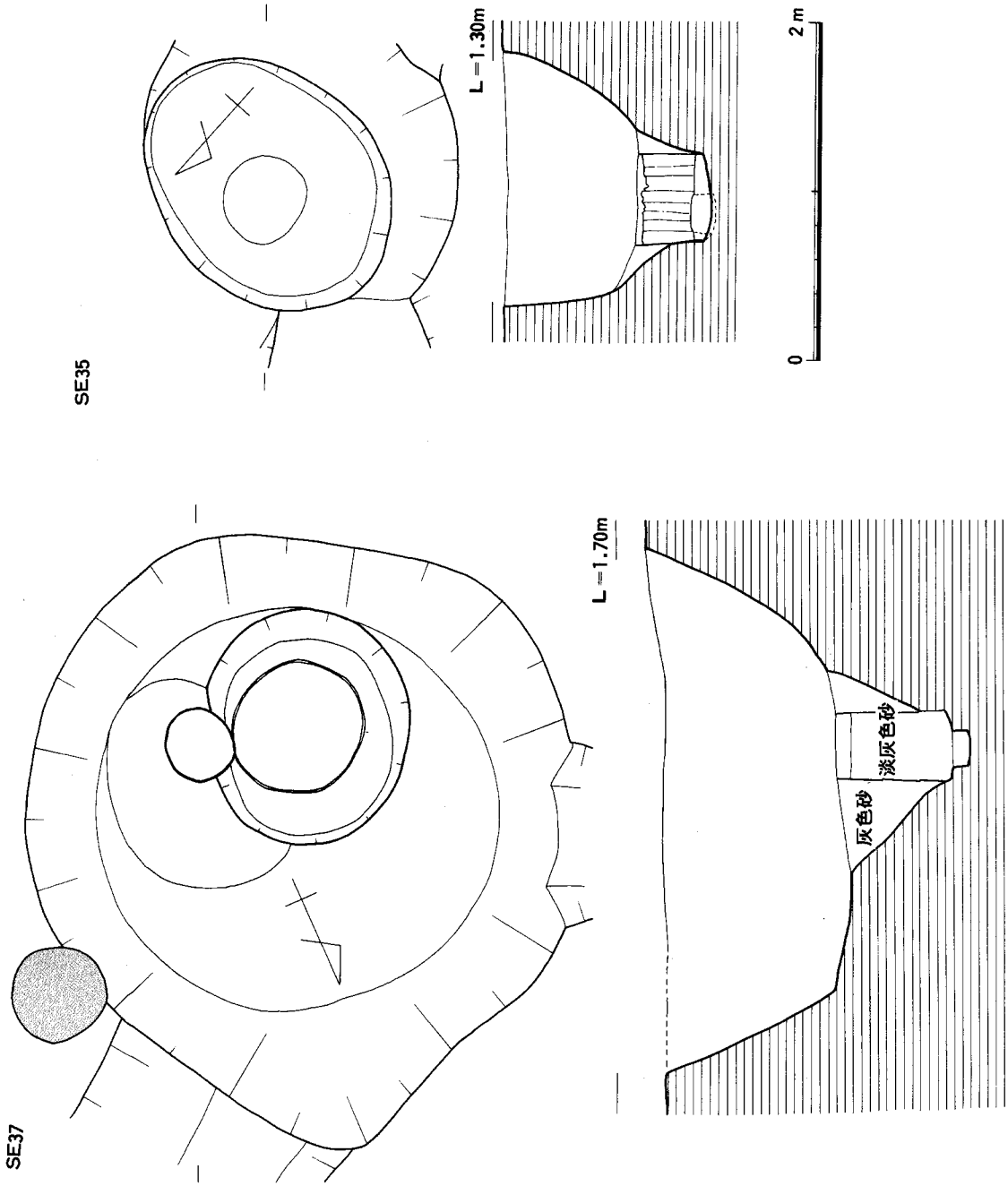
第4図　井戸実測図（1）

溝

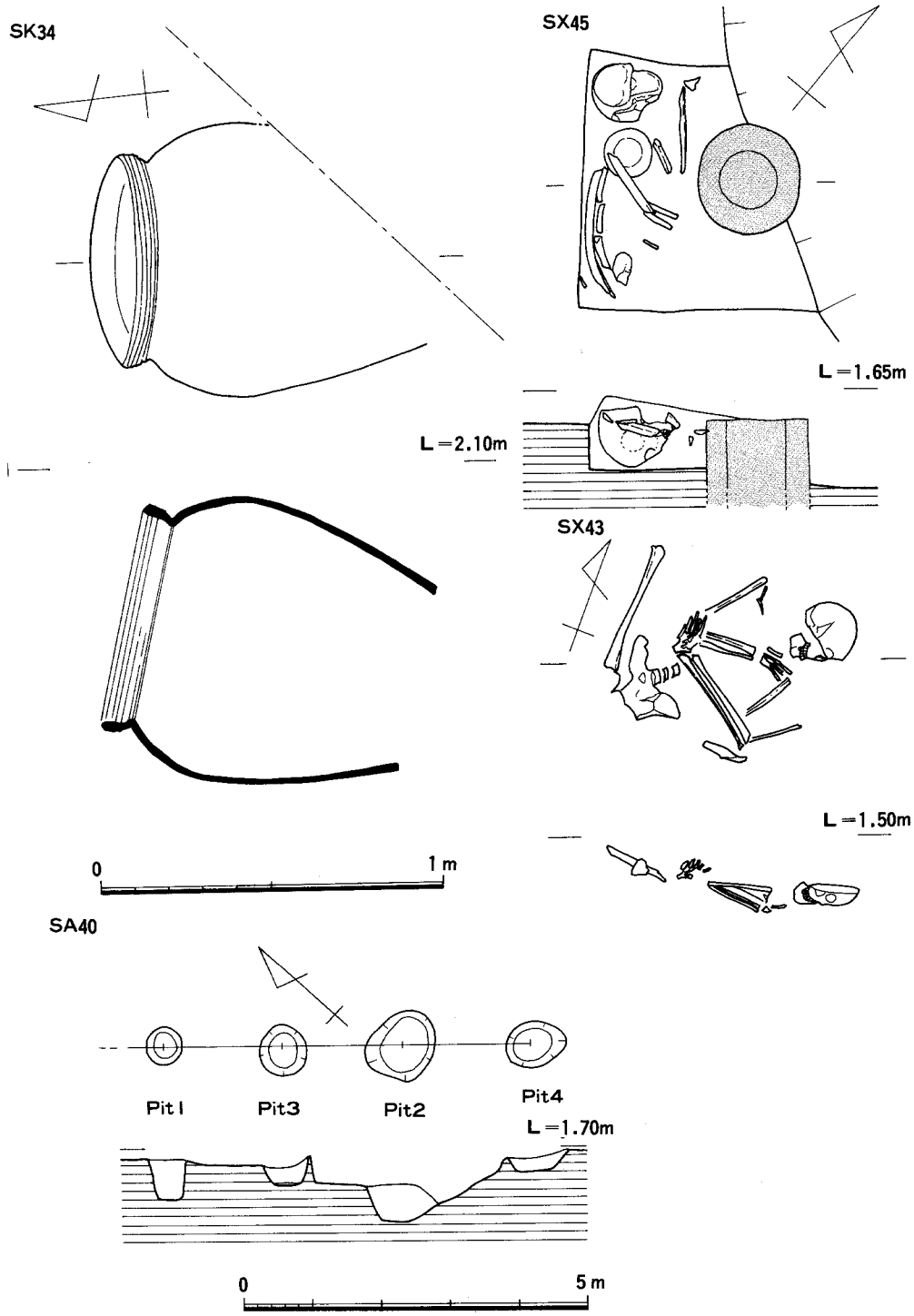
SD38（第3図、図版5）　調査区の中央を南西から北西に走る溝である。主軸はN－42°－Wにとる。幅0.9～1.5m、深さ0.2～0.4mを測り、遺物の出土はない。SE23井戸に切られている。

柵列

SA40　（第6図、図版7）　同一直線上に並ぶ墳墓群の南西に平行に走る。4個の柱穴から構成され、柱間の距離は1.8mを測る。SD38溝と直交し、溝と重複する柱穴Pit 2の底面レヴェルが他のものより低いことから、溝に伴う遺構とみられる。



第5図　井戸実測図 (2)


SK34
SX45
L=1.65m
L=2.10m
SX43
L=1.50m
0
1m
SA40
Pit1
Pit3
Pit2
Pit4
L=1.70m
0
5m

第6図　墳墓・柱列実測図

2　出土遺物

SE23出土遺物（第７図、図版６）　１～４は堀り方、５～８は井戸枠内からの出土である。

土師器

小皿（１）底部は静止糸切り離しによる。体部外面から内底部まで回転横ナデを施す。復元口径9.8cm、器高1.7cm、復元底径6.8cmを測る。

杯（２）底部は回転糸切り離しによる。体部外面から内底部まで回転横ナデを施す。復元口径10.6cm、器高2.4cm、復元底径6.6cmを測る。

白磁　椀（３）丸みをもった腰部から、口縁部が直線的にわずかに開き、端部は外側に軽く外反する。胎土はやや黄色味を帯びた灰色を呈し、やや軟質である。釉は透明で、細かい貫入がみられる。

陶器　すり鉢（４）　折縁のすり鉢で、口縁部付近に灰釉がかけられる。横ナデ後、内面に８本単位の条線をいれる。胎土は灰色、器表は茶褐色を呈する。

土師器　杯（５）　底部は静止糸切り離しによる。体部外面から内底部まで回転横ナデを施す。復元口径10.7cm、器高2.4cm、復元底径7.8cmを測る。

白磁　皿（６・７）端反りの口縁部と底部の細片である。

青花　皿（８）端反りの口縁部片で、端部を平坦にする。口縁部内面に界線１条、外面に界線２条を配する。外面の界線下の文様は不明。

李朝陶器　小杯（９）口縁部は腰部から屈曲し、外反気味に開く。

唐津系陶器　皿（10）外側に肥厚する口縁部の細片である。

SE35出土遺物（第７図、図版６・７）いずれも外枠からの出土である。

青花

大皿（11・12）福建・広東系の芙蓉手の大皿である。釉・呉須・胎土の特徴を同じくし、同一個体とみられる。11は口縁部、12は体部中位の窓絵の部分の破片で窓の中には花卉文が描かれている。

皿（13）景徳鎮窯系の折縁の口縁部片である。

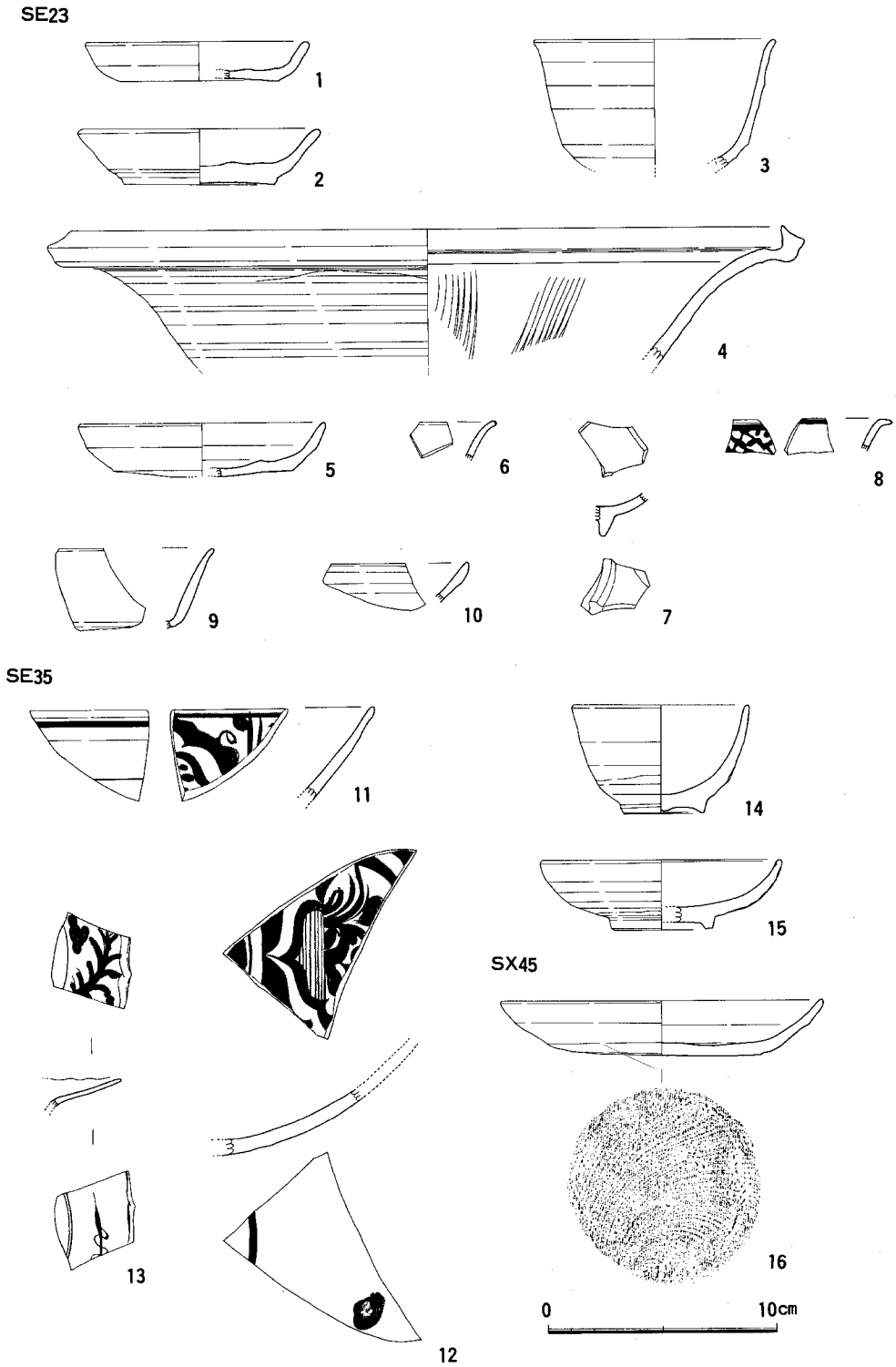
唐津系陶器

椀（14）丸みをもった体部から、口縁部が直線的に開く。高台内の削り出しは浅く、半月状を呈する。高台は露胎である。口径7.8cm、器高5.8cm、高台径3.5cmを測る。

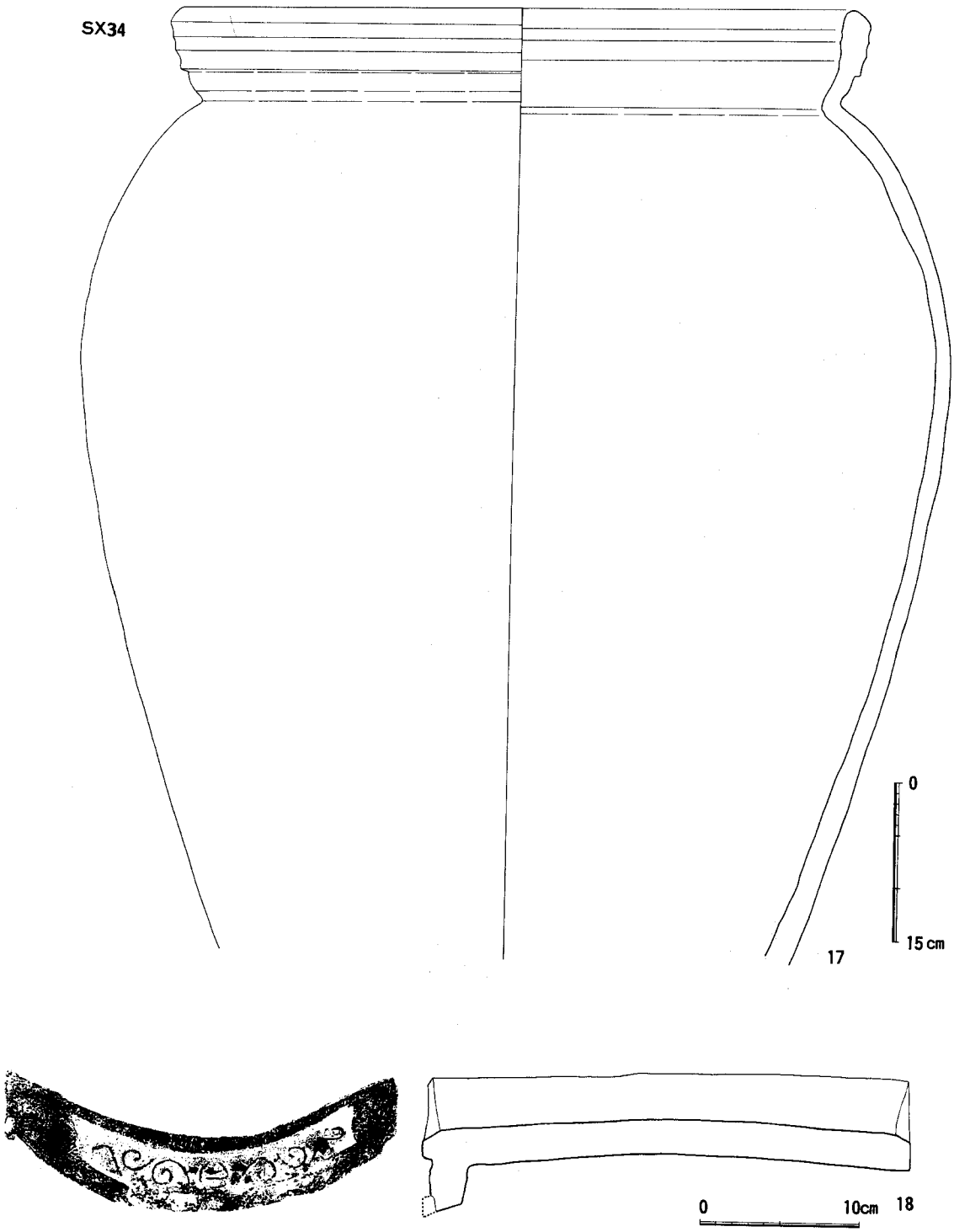
皿（15）体部から口縁部が丸みをも開き、口縁端部内面に沈線をもつ。高台内の削り出しは浅い。高台は露胎である。口径7.8cm、器高3.1cm、高台径4.5cmを測る。

SX45出土遺物（第７図、図版７）木棺墓の棺内副葬品である。

土師器　杯（16）底部は静止糸切り離しによる。体部外面から内底部まで回転横ナデを施す。



第７図　SE23・35、SX45出土遺物実測図



第8図　SX34出土遺物実測図

完形品で、口径14.2cm、器高2.4cm、底径7.6cmを測る。

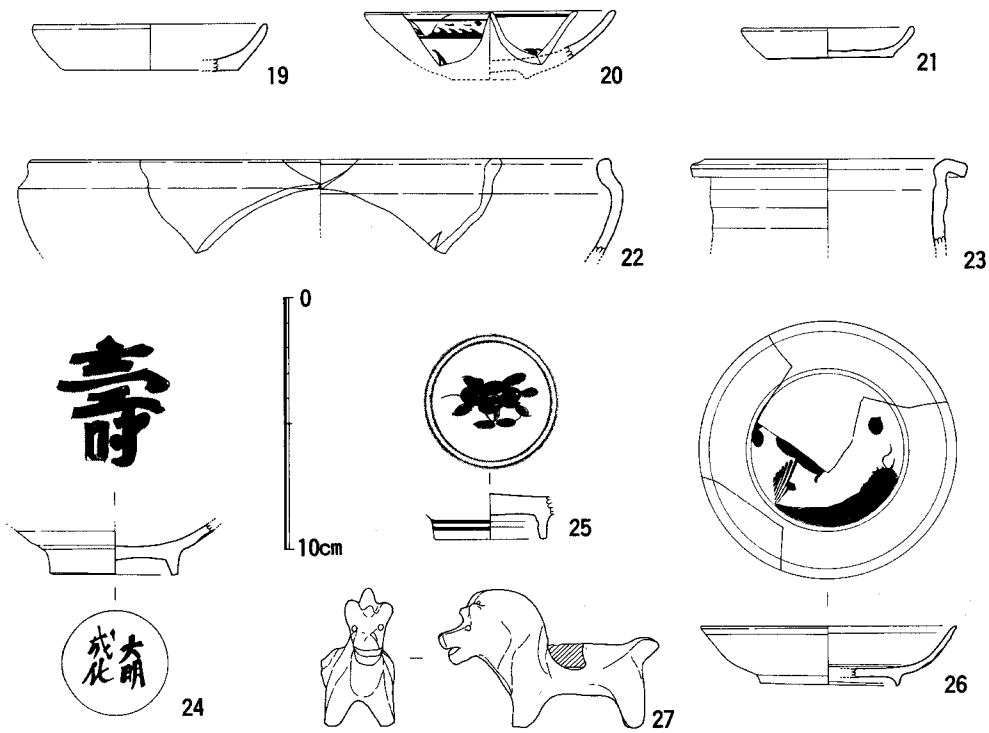
SX34出土遺物（第８図、図版７・８）　棺に用いられた大甕と棺内にあった軒平瓦で、後者については流れ込みの可能性が強い。

陶器　大甕（17）　備前焼Ⅴ期の大甕である。口縁部を折り曲げ玉縁状にし、外面に凹線をめぐらせる。口縁部は内湾しつつも外側に開く。胴部は最大径は上位にあり、口径66.6cmに対し84.0cm（復元）を測る。胎土には砂粒を多く含み、暗赤褐色を呈する。底部まで取り上げることはできなかったが、三石入りに相当しよう。Ⅴ期の大甕の中には紀年銘を箆書きする例が多く現存し細かく形態の変遷を追うことができるが、以上述べてきた特徴から文禄年間（1591～1595年）を前後する時期に焼かれたものであろう。

軒平瓦（18）　内区に宝珠形の中心飾を配し、左右に４回反転する唐草を配した均正唐草である。瓦当幅25.2cm、瓦当厚5.1cm、脇区幅左側4.8cm、右側2.9cmを測る。顎は曲線顎で、平瓦凹凸面はナデによって仕上げられ、離れ砂の痕跡が認められる。胎土には細かい砂粒を含む。名島城から同笵とみられるものが出土している。

SA40出土遺物（第９図、図版７・８）　19・20はPit 2、21～23はPit 3からの出土である。

土師器　杯（19）　底部は回転糸切り離しによる。体部外面から残存する内底部周縁まで回転横ナデを施す。復元口径9.4cm、器高1.8cm、復元底径6.8cmを測る。



第９図　SA40包含層出土遺物実測図

青花　皿（20）　かるく内湾気味におさめる碁笥底の皿体部より上位の細片である。外面は口縁部の２条の界線の間に波濤文、体部に蕉葉文、内面は口縁部下に１条の界線を配する。

土師器　小皿（21）　底部は回転糸切り離しによる。体部外面から内底部まで回転横ナデを施す。口径6.9cm、器高1.3cm、底径5.1cmを測る。

瓦質土器　すり鉢（22）　丸みをもった体部から、口縁部が内側に屈曲し、端部では直に立ち上がる。残存する部位はすべて横ナデで、体部内面にすり目とみられる条線の断片が残る。胎土は精良で、灰黒色を呈する。

陶器（23）　器種は不明。端部を平坦にする逆Ｌ字状の口縁部は、下方にやや垂れる。胎土は精良で灰色、器表は淡灰緑色を呈する。

包含層出土遺物（第９図、図版８）

青花

椀（24・25）　24は内底に壽、高台内に大明成化と染付する。25は内底見込みの２条の界線内に花卉文、高台に２条の界線を染付する。

皿（26）　口縁部内外面に１条、外面腰部に１条、内底見込みに２条の界線を染付し、見込みの界線内にも何らかの文様が染付されている。口径10.2cm、器高2.4cm、高台径5.5cmを測る。

土製馬形（27）　手捏ね成形により、目、口はヘラ状工具による刺突、切り込みで表現している。背に剝離した痕跡があり、鞍、人物像が置かれたのであろう。土師質の焼成で、胎土は精良で雲母を含み、淡黄灰色を呈する。

V 小　　結

当博多遺跡群第69次調査で検出された最も古い時期の遺構は16世紀末から17世紀初頭にかけてのもので、その切り合い等で確認された先後関係は以下の通りである。

SD38溝・SA40柱列→SE23井戸→SE35井戸

町割りに沿って築造された墳墓群　SE37井戸・SX34・43・45墳墓群については遺構が重複して検出されなかったために、先にあげた遺構との先後関係は不明であるが、墳墓群は同一直線上に並びそれぞれの心々距離は6.0m、3.0mを測る。1間当たり6尺5分（約2m）が一般的であった当時の城郭建築等の柱間の距離からすると、3間・1間半分に相当する。また、直線の主軸が豊臣秀吉の町割りを踏襲した現在の博多の町割りに沿ったものであることから、一定の規格をとって埋葬されたと考えられる。SD38溝・SA40柱列も同様に、町割りに沿った主軸を持つが、SA40柱列の柱間の距離は約1.8m（6尺）を測る。

唐津系陶器と共伴する明末の青花磁器　SE35井戸枠内からは福建・広東系の芙蓉手の大皿、景徳鎮窯系の折縁の皿の口縁部片が唐津系陶器椀、皿と伴って出土している。近年、明末の青花磁器については唐津系陶器等との共伴例が、国内各地域の消費地遺跡で数多く報告されている。博多遺跡群においては、15、16世紀には「博多浜」部を凌ぐようになるとされる「息の浜」部の調査が「博多浜」部ほどは行われておらず、今後「息の浜」部の調査が進むにつれて16世紀末から17世紀初頭にかけての唐津系陶器等との共伴例も増すことであろう。

博多の町の復興　1586（天正14）年の島津氏による焼き討ちの翌1587（天正15）年に、豊臣秀吉の命により度重なる戦乱により荒廃していた博多の町の復興が始まるが、当第69次調査区では16世紀末をさかのぼる時期の遺構、焼土層、遺構埋土中の焼土粒・炭化物は検出されず、16世紀以降にはじめて復興に伴う都市化の拡大、海岸線の前進といった要因によって人間の営みがなされるようになったのであろう。1597（文禄元）年に始まる文禄・慶長の役に際して、博多の町は兵站基地としての役割を果たすようになる。文禄年間（1591～1595年）を前後する時期に焼造されたとみられる備前焼の大甕が用いられているSX34甕棺墓に埋葬された人骨からは梅毒などによる病変の疑いが指摘されているが、文禄・慶長の役により蔓延したものであろうか。

博多遺跡群第69次調査出土中世人骨

中橋　孝博

九州大学医学部解剖学第二講座

博多遺跡群第69次調査出土中世人骨

中橋　孝博
九州大学医学部解剖学第二講座

はじめに

福岡市街地では、近年、様々な建設工事に伴って先史時代から近世に至るおびただしい遺構、遺物が出土し、古代より重要な交易地、あるいは商業都市として発展してきた「博多」の、多彩で変化に富む歴史が次第に具体的な像を結びつつある。人骨資料もまた徐々に蓄積されてきており、200体以上に及ぶ天福寺江戸時代人骨（中橋、1987）を始めとして、小数ながら中世期の人骨も毎年追加されている（中橋・永井、1986、'87、'88：中橋、1989、'90, '91, a , b）。都市の発展とその中に居住した人々の形質がどう相関しているかは人類学上の重要な課題であろうが、この「博多」は、そうした居住環境と住人形質の絡み合いの軌跡を2000年以上にわたって追える、人類学的にも数少ないフィールドの一つと言えよう。

1990年から91年にかけて、博多遺跡群第69次発掘調査が実施され、計３体の人骨が出土した。今回の調査区は旧「博多」市街地の北半、いわゆる「沖の濱」と言われる一帯であり、同区域からの人骨の出土は昨年の第42次（中橋、1991）についでこれが２度目である。従来より盛んに発掘調査がなされ、それに伴って人骨も出土していた一帯は、いわゆる「博多濱」といわれる南半部にあたるが、歴史的にはこの南半部が先に発展し、いわば古代博多の発祥の地とされている。「博多濱」の北部は永く湿地帯だったようだが、11世紀後半からその一部が埋め立てられ、より北の博多湾に面して広がる「沖の濱」ともつながって、次第に市街地がそちらにも伸び、以後、「博多」はこの両区域を併せたかたちで興亡を繰返して行くことになる。今回の調査によって、「沖の濱」では16－17世紀以降の遺構しか存在しないことが判明したが、人骨はその最も古い層から出土した。いわばこの区域の最初の住人の遺骨ということにもなろうが、ただ、残念ながら人骨の保存状態は極めて悪く、形態的な検討は一部を除いて不可能であった。従って観察所見のみであるが、以下に精査した結果を報告する。

遺跡・資料

博多遺跡群第69次調査は、1990年12月から翌91年１月にかけて、かつての「博多」の北半部、「沖の濱」にあたる、博多区奈良屋町267でのビル建設工事に伴って実施された。調査の結果、当区域では中世末のほぼ戦国時代の遺構を最古として、それより下層には文化層が存在しないことが明らかにされた。今回の埋葬遺構は、地表下約1.5ｍのその中世末の包含層下面で検出

されたものである。表1に一覧したように、計3体出土したが、いずれも埋葬施設が異なり、内1体（SX 34号）は、類例の少ない備前焼の大甕中に埋葬されていた。また今回検出された埋葬遺構は、かつての豊臣秀吉による街割りに沿って一直線上に並んでいることから、当時はこの区域が墓地として整備されていたものと推察されている。なお、「沖の濱」は当時、博多の豪商が多く居館を構えていた地とされ、特に備前焼中に埋葬されていたSX 34号などは、そうした当時の勢力者の遺骨ではないかとの推考もなされている（別項参照）。

所属時代は、上記のような層序関係や、備前焼、あるいは副葬品の土師器杯などに対する考古学的検証から、16世紀末－17世紀始めの、ほぼ戦国時代の博多に生きた人々の遺骨と考えられている。

表1　博多遺跡群第69次調査出土中世人骨

番号	性	年齢	保存状態	所属時代	埋葬施設	頭位	埋葬姿勢	副葬品
SX 34	男　性	熟年	不良	中世末	甕　棺	北(甕の方向)	不　明	なし
SX 43	男　性	成年	不良	中世末	土拡？	北東	仰臥屈葬	数珠？
SX 45	女性？	成人	破片のみ	中世末	木　棺	北	仰臥屈葬？	土師器杯1

結果

1，SX 34号人骨

出土状況：調査区南端に検出された備前焼大甕中に埋葬されていた個体である。甕主軸は北を向いているが、詳しい埋葬姿勢は不明。保存状態は不良ながら、甕棺であったため、頭蓋については今回出土の3体中では最も原形を保っている。ただ、体部骨は細片化が著しく、殆ど同定不能の小片が小量遺存するだけである。棺内に軒平瓦が1枚見いだされたが副葬品かどうかは不明。

性別・年齢：骨盤や四肢など、判定に有効な部位が殆ど欠落しているため確定は困難だが、頭蓋遺存部位のうち、右乳様突起、及び外後頭隆起の発達が比較的良好で、歯のサイズもかなり大きいことから男性と判定される。また、冠状縫合にはまだ癒着は認められないが、歯の咬耗がかなり進行して、全歯ともエナメル質が大きく露出した状態にあることから、既に熟年に達した個体と見なされる。

所見：右前頭部から頭頂骨にかけての部位が遺存するが、頭頂骨の側頭線の一部がやや異常な程に鋭い稜線をなし、その上部が径4㎝ほどの円形状の陥凹部を形成している。頭頂骨はその部位での薄化が著しく、やや不整な表面をなし、周縁部は僅かながら土手状に肥厚している。あるいは梅毒などによる病変の可能性も考えられなくないが、保存状態が悪く、他の部位での観察も不可能なので確定は困難である。

下顎、及び歯はかなり回収されたので、以下に歯式を示しておく。下顎骨体はかなり厚く、

歪みのため計測は出来ないが、かなり頑丈な特徴を窺わせる。なお、右下顎体に副オトガイ孔が確認された。

／	$\dot{M}_2$	$\dot{M}^1$	／	$\dot{P}^1$	$\dot{C}$	$\dot{I}^2$	／	$\dot{I}^1$	／	$\dot{C}$	／	／	／	／	／
／	$\dot{M}_2$	×	○	○	C	○	○	I_1	I_2	C	P_1	○	M_1	M_2	／

（○：歯槽開放、×：歯槽閉鎖、／：欠損、●：遊離歯）

2，SX 43号人骨

出土状況：調査区中央付近で検出されたが、墓壙掘り方がはっきりせず、土壙墓か否かも判じ難い。体軸はほぼ北東を向き、頭蓋を左へ向けた仰臥屈葬位で埋葬されていた。上腕はほぼ体側に沿っているが、肘は左右とも強屈して右手は左胸に、左手は体側左に置いている。股関節もあぐらを組むような形で強屈して大きく開き、右下腿は確認できないが、左下腿は丁度腹部上に乗せられている。

保存状態はやはり不良で、一応全身各部の破片を確認できるものの、歪みや細片化が著しく、原形を保っている部位は見いだし難い。なお、人骨埋砂中から数珠玉が出土した。

性別・年齢：発掘時における観察によって、骨盤の大坐骨切痕の角度が小さく前耳状溝が無いことが確認され、また上腕骨体の太さなどからみても男性の可能性が強い。また、縫合の観察は出来なかったが、残存歯の咬耗度が比較的軽度なことから、30歳台位の男性と推察される。

所見：頭蓋、四肢とも観察不能なので、以下に残存歯にもとづく歯式だけ示しておく。上下とも第３大臼歯が欠落（未萌出）している他は全歯が揃っている。また、下顎前歯列に著しい歯石付着が見られた。歯のサイズはやや小さい。

×	M^2	M^1	P^2	P^1	C	I^2	I^1	$\dot{I}^1$	$\dot{I}^2$	$\dot{C}$	$\dot{P}^1$	$\dot{P}^2$	$\dot{M}^1$	$\dot{M}^2$	×
×	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	×

3，SX 45号人骨

出土状況：調査区南側で検出された人骨で、棺材と思われる木片や釘が出土しているので、木棺墓とみなされている。体軸は北を向き、上半身は不明瞭ながら、主に下肢の状態から、股関節を強屈した仰臥屈葬位で埋葬されていたものと推察される。保存状態はきわめて悪く、回収後の歪みなども加わって、頭蓋の一部を除き、殆ど同定不可能なほどに細片化してしまっている。なお、当人骨には、その胸部あたりに土師器杯１枚が副葬されていた。

性別・年齢：発掘時の観察で、主に四肢骨体が比較的細いことから、一応、女性の可能性が考えられたが、保存状態が上記のような状況のため、確認は困難である。また、歯も回収できなかったので詳しい年齢区分は不明とするしかないが、四肢骨のサイズからみて、成人には達

した人骨と考えて大過なかろう。

総括・考察

「博多」における第69次調査によって、かつての「沖の濱」にあたる区域の墓地が検出され、計３体の中世末（16世紀末－17世紀始め）の人骨が出土した。内１体は（SX 34号）、備前焼の大甕中に見いだされ、当時の有力者とおぼしき人の遺骨であったが、今回出土の人骨はいずれも保存状態が不良で、形態的な特徴については摑み得なかった。

ただ、その埋葬姿勢について、３体とも、頭位を北かもしくはそれに近い方向に向けていること、また内２体がおそらく仰臥屈葬位で埋葬されていたことに少し触れておきたい。今回見られたような股関節を強屈した仰臥位での埋葬は、博多でのこれまでの出土例中では比較的珍しいが、あるいはこれがこの時代、この地区の埋葬風習だったのであろうか。埋葬姿勢は時代や地域によって多様な変化を経て来ており、中世から近世にかけては、遺跡によっては宗教的な規制による、北頭位、右側臥屈葬に強く統一された例が各所で見られるが、博多ではそうした規制が比較的ルーズであったことがこれまでの調査によって明かにされている（中橋、1991ｃ）。当時の埋葬風習の一端を窺せる問題点でもあるので今後とも継続して注意を払っていきたい。

また、ＳＸ 34号人骨の右頭頂骨に約４㎝径の、低い周縁を持った不整な陥凹部が見いだされた。一応の可能性としては梅毒などによる病変が疑われたが、保存不良なこともあって残念ながら正確な判定は困難であった。後世の同じ博多出土の天福寺江戸時代人にはより明確な梅毒によるものと思われる病変例が存在するし（未発表）、特に江戸ではこの病気が猛威をふるっていたことは良く知られているところである（鈴木、1984）。戦国時代の当地の豪商あたりにもこの病が広がっていたのであろうか。今回の所見からだけではまだいずれとも判断し難いが、博多が大陸などとも交易のあった港町であることを考えれば当然のこととも考えられよう。当時の博多商人の生活の一面を窺わせる意味で興味深い点でもあるので、今後の資料追加を待って詳しく検討を加えたいと考える。

謝辞：当人骨を研究する機会を与えていただき、種々御教示いただいた福岡市教育委員会の諸先生、諸氏に深謝致します。また、資料整理に当たっては、九州大学考古学教室の金宰賢、Lise Hodgkinson 両氏の御助力を得た。末筆ながら記して謝意を表します。

文　　献

大庭康時（1989）：「博多」福岡市埋蔵文化財調査報告書204、福岡市教育委員会
中橋孝博（1989）：「博多遺跡群第26次調査・築港線関係第３次調査出土の中世人骨について」博多、福岡市埋蔵文化財調査報告書204、福岡市教育委員会。
中橋孝博（1990）：「博多遺跡群第40次調査出土の中世人骨について」博多15、福岡市埋蔵文化財調査報告書230、福岡市教育委員会。
中橋孝博（1991ａ）：「博多遺跡群第42次調査出土の中世人骨」博多17、福岡市埋蔵文化財調査報告書245、福岡市教育委員会。

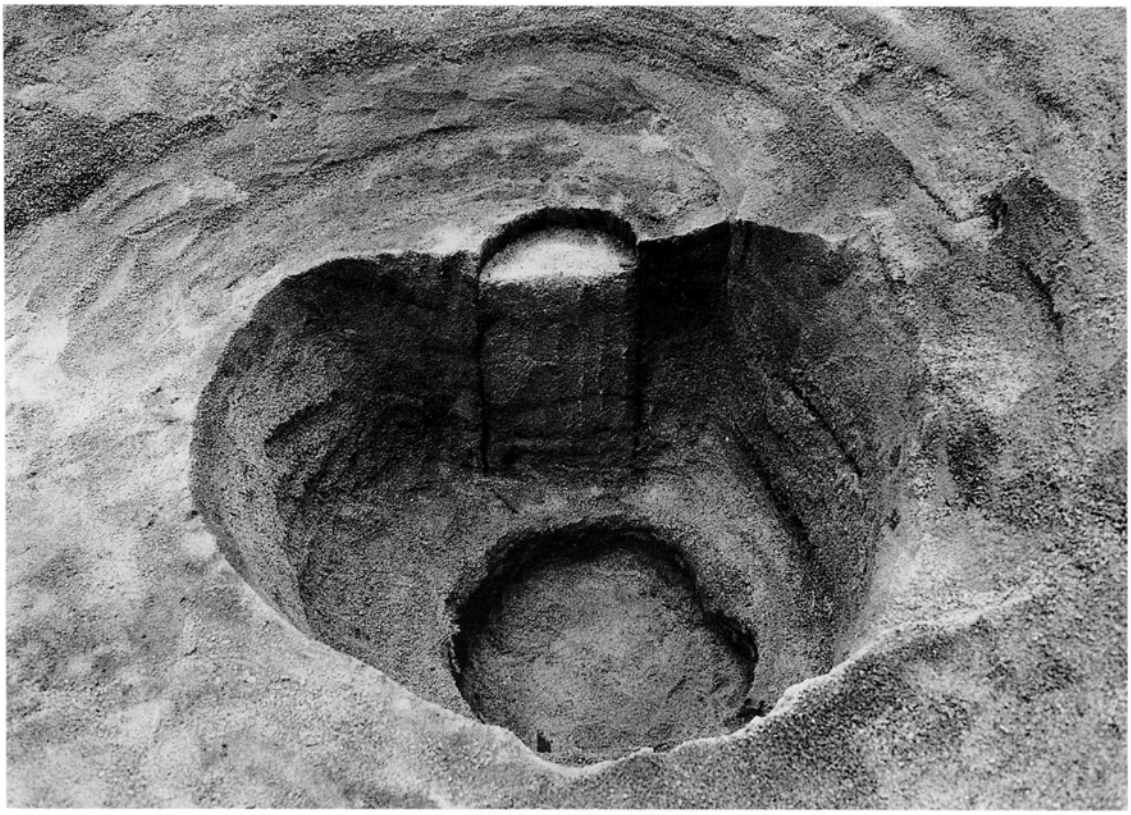
中橋孝博（1991ｂ）：「博多遺跡群第58次調査出土の中世人骨」博多23、福岡市埋蔵文化財調査報告書251、福岡市教育委員会。
中橋孝博（1991ｃ）：「福岡市上月隈遺跡出土人骨（弥生・近世）」上月隈遺跡、福岡市埋蔵文化財調査報告書230、福岡市教育委員会。
中橋孝博（1987）：「福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨」人類学雑誌43。
中橋孝博・永井昌文（1986）：「博多遺跡群第26次調査出土中世人骨」博多４，福岡市埋蔵文化財調査報告書144、福岡市教育委員会。
中橋孝博・永井昌文（1987）：「博多遺跡群第28次調査出土中世人骨」博多７，福岡市埋蔵文化財調査報告書147、福岡市教育委員会。
中橋孝博・永井昌文（1988）：「博多遺跡群第33次調査出土中世人骨」博多11，福岡市埋蔵文化財調査報告書176、福岡市教育委員会。
鈴木隆雄（1984）：「江戸時代の梅毒流行の古病理学」人類学、日本人類学会編、日経サイエンス社。

図　　版

1．博多遺跡群第69次調査区全景（北西から）

2．博多遺跡群第69次調査区全景（南東から）

図版 2



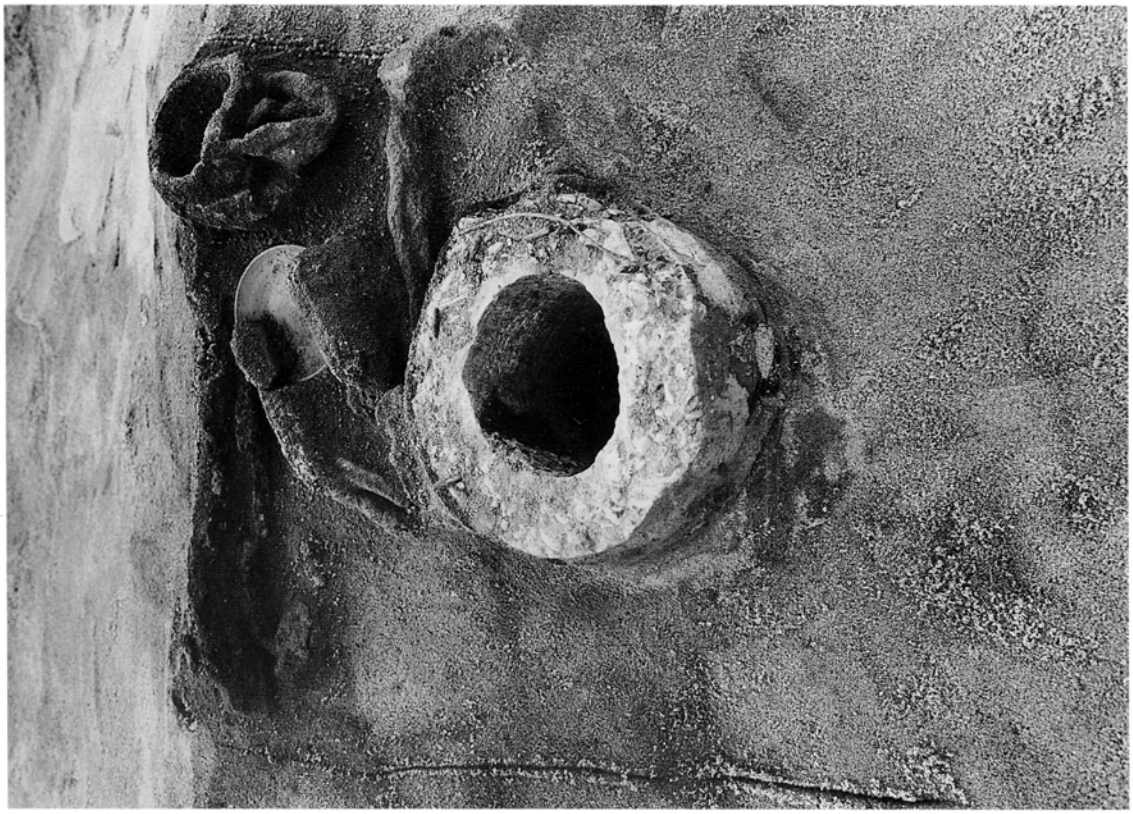
1．SE23・37井戸（西から）

2．SE37井戸（西から）

1．SE35井戸（北西から）

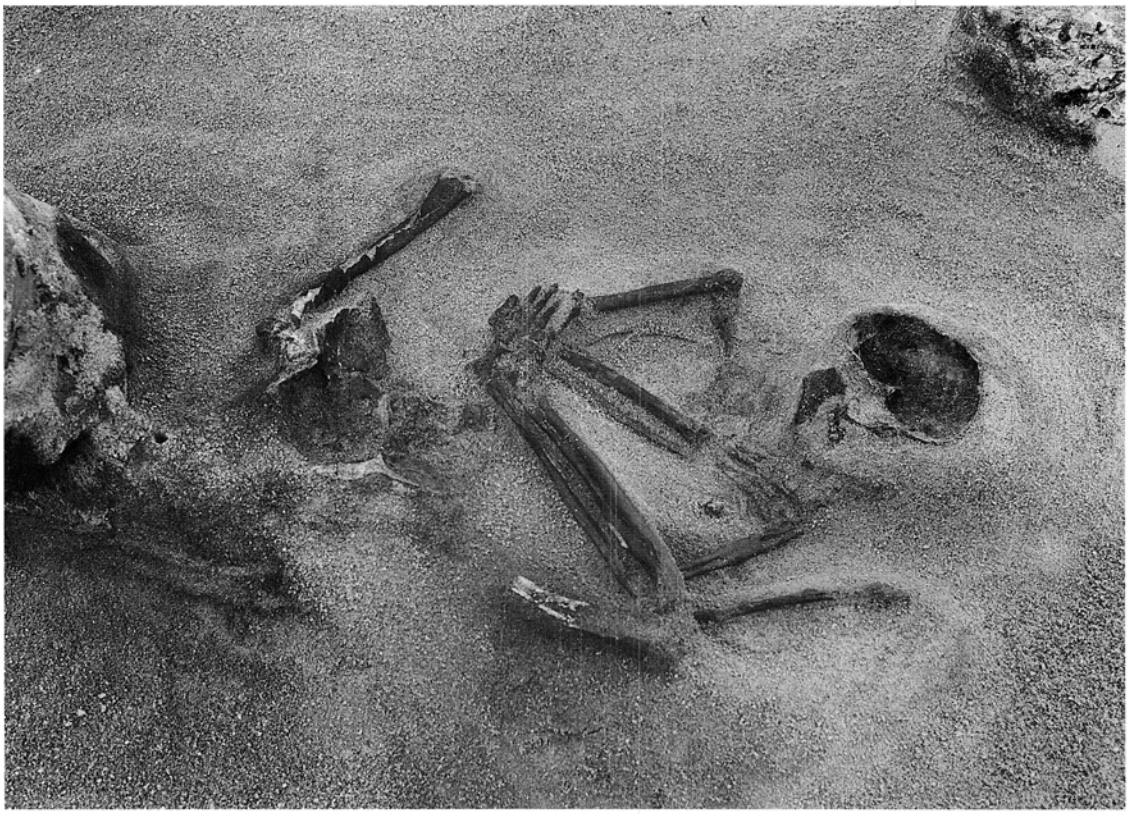
2．SE34甕棺墓（北から）

図版 4



1．SX45木棺墓（北東から）

2．SX43土壙墓（南西から）

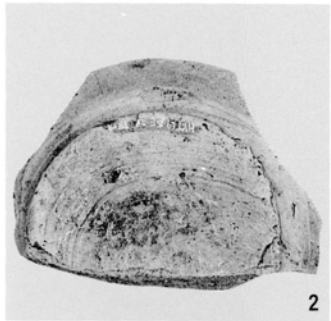


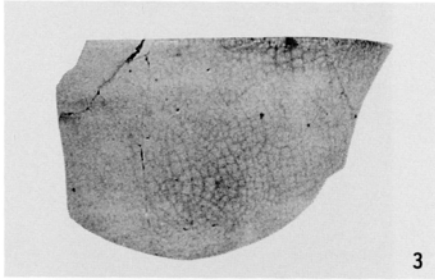
1．SX43土壙墓（南東から）

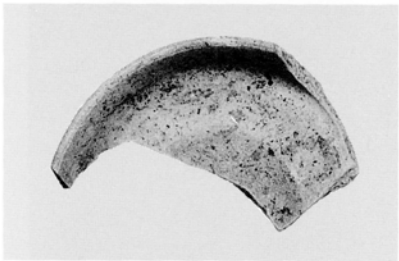
2．SD38溝（北東から）

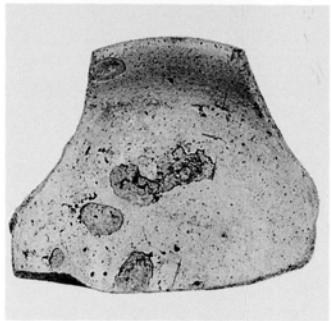
図版 6

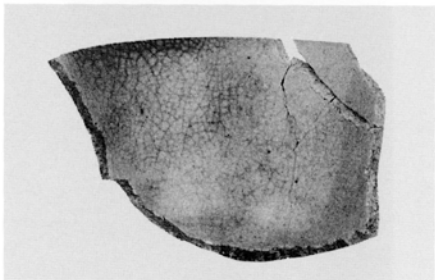
1

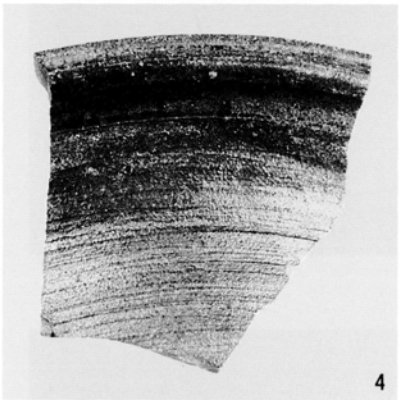

2

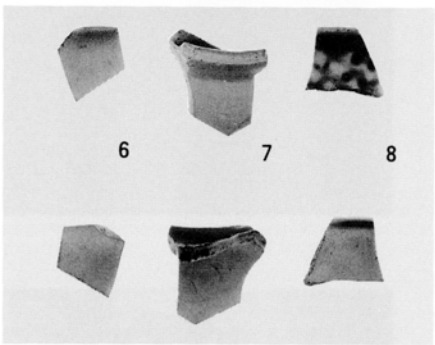

3

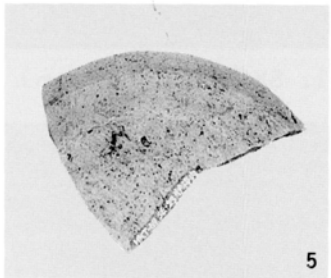


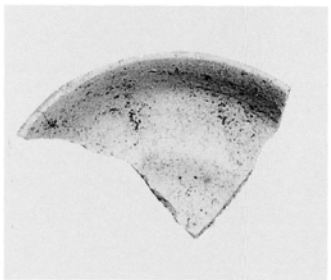


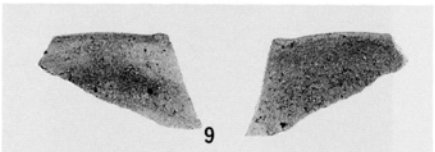


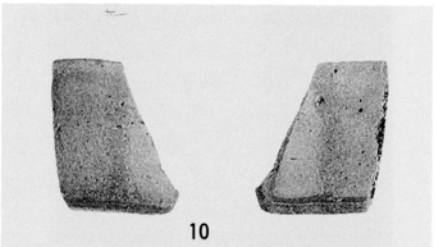

4


6 7 8


5

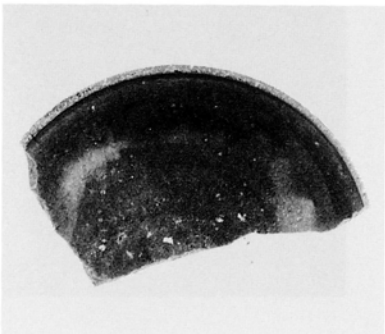



9

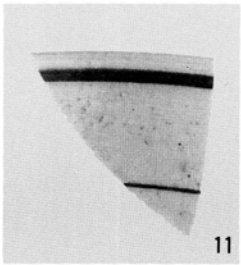

10

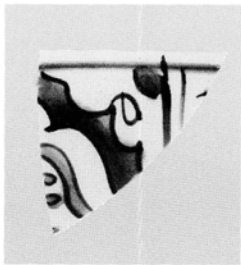
14

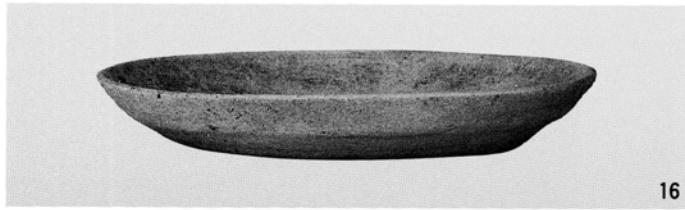
15

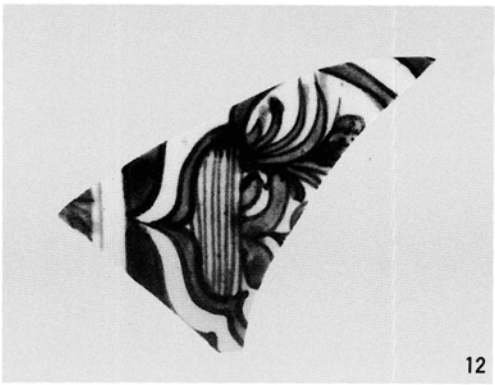


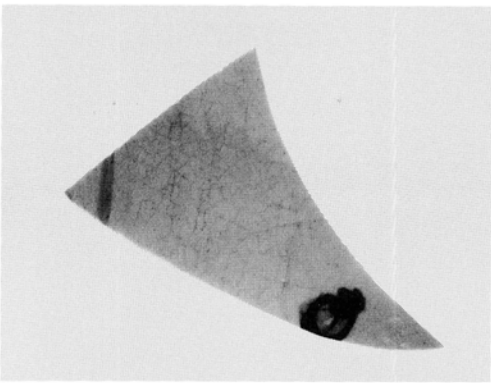
ＳＥ23・35出土遺物

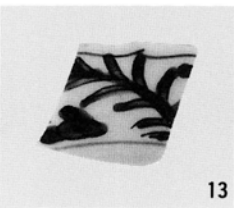

11

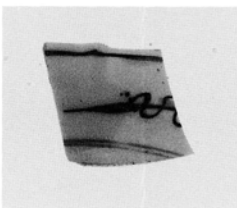


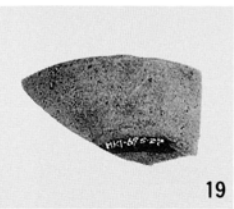

16

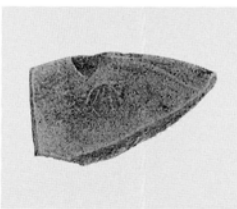

12

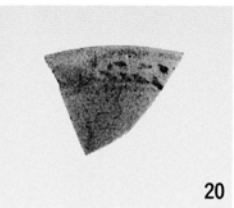


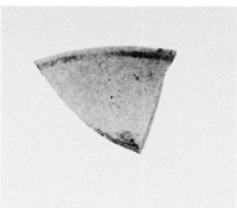

13




19

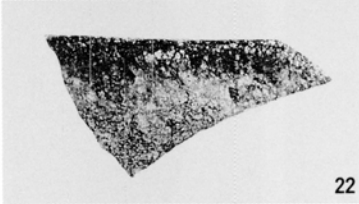


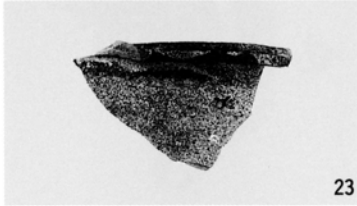

20

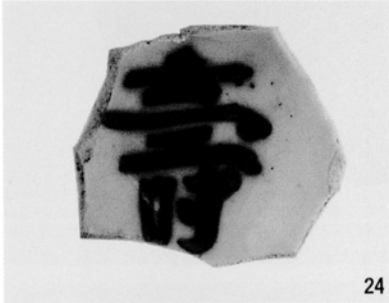


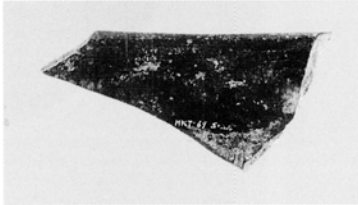
17

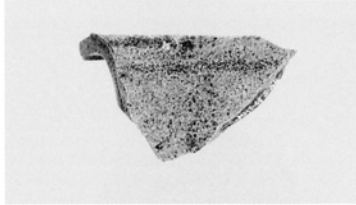
ＳＥ35、ＳＸ34・45出土遺物

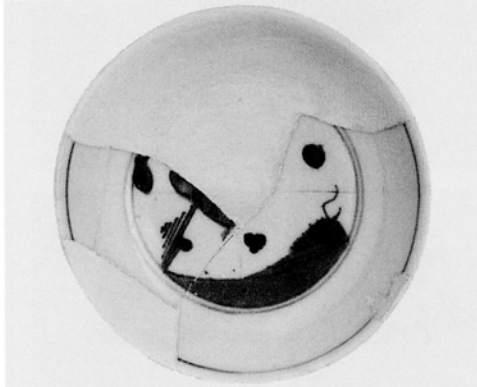


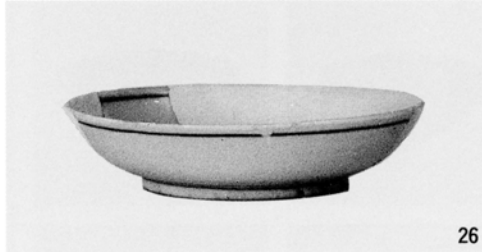












ＳＸ34、ＳＡ40、包含層出土遺物

博　多　33

―博多遺跡群第69次発掘調査概報―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第288集

1992年3月13日発行

発 行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印 刷　博巧印刷株式会社